

しょうかわざくら さとう りょうじ
莊川桜 — 佐藤 良二

※1 名古屋・金沢間の
路線バス

昭和三十二年、御母衣ダムの建設工事が始まりました。写真の好きな良二は、水没前の村の様子を写真におさめていましたが、ある日、莊川村の水没予定地にある樹齢四百年の二本の莊川桜の木を移植する話を聞きました。

この莊川桜は、村のお寺の境内にありました。高さ二十メートル、幹の周囲六メートルの堂々としたすがたで、春がめぐり来るたびにらんまんと花を咲き広げて、村人のほこりとなっていました。名金線※1の国鉄バスの車しゅうをしていた良二にとっても、車窓からながめるその姿は、いつも、心のなぐさめとなっていました。ですから、良二にとっても、この木を移植する話は、他人事ではありませんでした。

白鳥町にある良二の自宅から移植現場までは、四十キロメートルもの道のりがありますが、良二は、仕事のひまを見てはバイクを走らせたり、親友の佐藤高三の運転する車にのったりしてかけつけ、移植の様子を写真におさめました。ブルドーザーやクレーン車を使って慎重に移動させ、傷つけないように静かにつり上げていく、その作業は、良二の心に大きな感動をあたえました。

翌年の春になりました。まだ、風の冷たい四月のある日、移植された莊川桜の木の下に立った良二は、木の幹を見てはっと息をのみました。いくえにも巻かされたわらのすき間から、緑の芽が出ているのです。良二は、桜の生命力の強さを感じました。

良二は、四百年の歴史をもつ桜の木の子孫を、名金線に沿って植えようと思いつき、莊川桜の種子を拾い始めました。手いっぱい種子を拾っても、三分の二は虫食いだったり、中が空洞になったりしていました。それでも、良二は種子を拾い続け、家のうら山に苗床をつくり、小屋を建ててそこにこもり、

桜の苗木なえぎを育てようと思いました。

しかし、種子なえから苗なえにまで育てるには、あまりにも長い年月がかかりました。良二は、来る年も来る年も種子をまきましたが、なかなか芽めが出てこないのです。しかし、良二はそれにもくじけずに種子をまき続け、桜の芽めが出るのを待ちました。

七年目の春が来た時、莊川しょうかわさくら桜の種子はやっと芽めをふきました。たった三本でしたが、良二はとび上がって喜びました。そして、三本の苗木なえぎに、「莊川一郎しょうかわ」「莊川二郎しょうかわ」「莊川三郎しょうかわ」と名前をつけて、わが子のようにかわいがりました。芽めにほおを寄せたり、話しかけたりして、乳飲ちのみ子をいたわるような育てぶりでした。

良二は、その三本の苗木なえぎを育てながら、一方では自分の給料をさいて桜の苗木なえぎを買い、それをバイクの後ろにくくりつけて、名金線に沿ったバス停、学校の校庭のすみ、工場のへのわき、橋のたもとなどへ運び、植え続けました。道ばたの土がやせていると家から土を運んで植えたり、冬になると、わらやこもを持って行き、一本一本雪ゆき囲がこいをしたりしてやりました。



そして、全線二百七十キロメートルの区間を桜のトンネルにするために、募金ぼきんを思いつき、自分の夢ゆめを熱っぽく語りながら、県内をかけ回りました。その努力が実を結び、桜の木を植え出してから十一年目に、良二は、名古屋金沢間の市町村に、二千本もの桜さくらの木を植えていました。しかし、そのころから、良二の体は悪くなり、横になることが多くなりました。

昭和五十一年七月、やせ細った良二は、力をふりしぼり、うら山の畑の一本

の苗なえを土からほりあげて、鉢はちに植えかえました。そして、その鉢にふるえる手て、

「莊川七郎しょうかわです。今後四百年お世話になります。よろしくお願いします。」
と書き、いっしょに桜の苗なえを植え続けている、仲間の高二こうざうに後のことをたくしてから、名古屋の鉄道病院に入院しました。

昭和五十二年の元旦、良二は、友人と植えた高鷲村たかすの桜のことが気になり、病院の廊下ろうかにある電話機まではってたどりつき、友人に話しかけるのです。

「あの道ばたに植えた桜さくらは、雪で折れていないだろうか。それとも、自動車の
はい気ガスで、かかれていないだろうか。たのむから、見てきてくれ。」
と。

それから間もなく、良二は意識いしきを失い、この年の一月二十五日にこの世を去りました。

内容項目 四―(七)

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「灯を持つ乙女」

(昭和六十一年七月)